

鶴岡食文化創造都市推進協議会 - 英語webサイト(北前船が運んだ食文化)

江戸時代中期(1603～ 1867年)、貨物船が大阪から関門海峡(本州と九州を隔てる)を經由して日本海に沿って航海し始めました。明治時代(1868～1912)には、その数は急速に増加しました。これら北前船は、関西から太平洋岸を經由して江戸(現在の東京)まで日用品を収容する一般の船とは異なり、往路と復路で物資を運びました。一般の江戸行きの船は、帰りが空であり、その利益は制限されていました。

一方、北前船の交易路は、富山県、新潟県、山形県の港を含む日本海沿岸に沿った複数の寄港を特徴とし、旅からの収入を最大化しました。商船員は、旅の途中で何でも売っていました。利益を生む可能性のある船倉のものを売り、掘り出し物と見なされるものを購入し、次のストップで販売していました。

この売買の慣行は、北前船コースに沿った港間の発展をもたらしました。商人たちは、北前船の乗組員が拾い上げて、航海中に他の地域で出会った人々と共有した文化や商品を交換しました。たとえば、青森県の民謡「つがるあいや節」は北前船によって派生したと理解されています。これは新潟県の歌「佐渡おけさ」から、あいや節という津軽の曲をベースにしているとされています。

もう一つは、北前船による北海道から西日本への昆布の導入です。このだし汁の基本成分は、江戸時代の料理を一変させ、伝統的な日本料理の基本的な材料になりました。

北前船船はまた、ひなまつり(女の子の成功と健康を祈る人形祭り)のお菓子を作る習慣を鶴岡にもたらしました。お菓子を作るための木版型は、商人の船乗りを介して京都から持ち込まれました。

ひながし(人形まつりで提供するお菓子)は、通常、地域の豊かさを反映して作られています。

たけのこ、桃、柿、鯛など、子供たちに人気のある食材が含まれ健康増進、成功を促します。鶴岡のひながしは、京都の優雅で洗練された文化と、江戸時代に一般的だったしんこ細工に影響を受けています。この鶴岡ならではのひながしは、幸運への感謝と女の子の成長と幸せへの願いを表し、鶴岡のひなまつりに欠かせない存在となっています。

これらのひながしを生産するのに最も忙しい時期は、2月中旬から4月上旬までです。

鶴岡とその周辺地域では家庭によって、ひなまつりが3月3日と4月3日の2回祝われます。

ひなまつりの時期には、北前船を經由して鶴岡に運ばれたひな人形と並んで、雛菓子が地元の家に展示されます。ひな人形は、庄内雛街道や鶴岡雛物語など、鶴岡の複数の場所で展示されます。